



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	当日配布資料
Description	当日配布資料 「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」 シンポジウム報告書: 子ども発達臨床研究センター総合研究企画(2011サステナ企画). 平成23年11月2日(水)~4日(金). 北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 教育学研究院会議室. 札幌市
Citation	「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」 シンポジウム報告書, 114-120
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/49393">https://hdl.handle.net/2115/49393</a>
Type	other
File Information	Shiry00kuzuke.pdf



<子ども発達臨床研究センター総合研究企画（2011 サステナ企画）>

# 遊ぶ・学ぶ・働く

—持続可能な発達の支援のために—

日程 11月2日(水)19時から4日(金)12時まで

会場 11月2日(水)・3日(木)

北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W103

11月4日(金)

教育学研究院 会議室（3階）

## 【日程表】

					18:30	19:00	21:00
11月2日(水)						開場	A 基調講演
		9:30	12:00	13:00	15:30	16:00	18:30 19:00 21:00
11月3日(木)	B シンポジウム I		C シンポジウム II		D シンポジウム III		
		9:30	12:00	13:00	15:30	16:00	18:30 19:00 21:00
11月4日(金)	E パネルディスカッション						

<開催にあたって>

近代以後に築かれた大量生産・大量消費型の社会や暮らしの見直しが必至となる下で、教育は新たな社会を創造する市民を形成する鍵を握っています。

しかし、教育実践の現場に目をやると、子ども・親のみならず支援者どうしてもコミュニケーションをとることが難しくなり、発達支援にあたる人々の間では様々な戸惑いや苦悩、さらには孤立感・消耗感が広がっています。

次の時代を担う子ども・若者の間では、不登校や高校中退などに典型的に示されるように、学校を中心とした学びの場から早期に遠ざかる人たちが依然として減らず、学校を出たあとも不安と焦りを抱えながら人生像を模索せざるを得ない人々がかつてなく増えています。

新たな時代を切り開く市民が育つことへの期待が高まりながらも、「人が育つ」ことそのものの難しさが明らかになったのが現在でしょう。

このような時代状況に鑑み、北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センターでは、改めて「人が育つ」こと、そしてそれを支援することを問い返し、発達の可能性が抑制されることがないという意味で持続可能な発達の論理と、今の社会に求められる「人が育つ場」を構築する展望を探求していくことにしました。

私たちの暮らしは、<遊ぶ・学ぶ・働く>という活動から成り立っていますが、年齢段階に応じて人間的・人格的な発達を主導する活動は変化していきます。そこで今回の総合研究企画では、この3つの活動の各々に即しながら、発達可能性を拡張する展望を検討することにしました。それは同時に、幼児期から成人期に至るまでの連続的な発達可能性を保障するための課題を明らかにすることにもつながるはずです。

このような見通しを描くことによって、すべての人々の発達可能性を決して断念させることなく、希望をはぐくむ教育を実現するための課題もまた明らかになるでしょう。

11月2日には精神科医の青木先生に、今の時代がもたらす生きづらさについてお話し頂き、3日には上記の3つの活動に即しながら問題を深める連続シンポジウムを開催します。4日は福祉実践の現場から、新たな人間発達の論理を提起して頂きます。理論と実践の諸領域を超えた学際的・総合的な討議により、「人が育つ社会」への展望が明らかにされることを願っています。

本企画にご参加頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

<内容> (敬称略)

A：基調講演 演題：「時代が締め出すところ ～不寛容と無責任への疑義～」

日時：11月2日(水) 午後7時～9時(開場：午後6時30分)

会場：人文・社会科学総合教育研究棟 W103

演者：青木省三(川崎医科大学)

司会：田中康雄(北海道大学)

趣旨：人が育つ場についての多面的な検討と展望の探求を目指すという、今回の企画において、われわれは基調講演を青木省三氏に依頼しました。

氏は「時代が締め出すところ 精神科外来から見えること」という最新刊で「改めて現代という時代を見つめ直したとき、私たちの生きている時代は、少数派の人、異質な人が生きにくい社会を作っているのではないかと思うのである。時代の主流派、多数派に合わない人が、社会の中で孤立し、その一部の人には、病気や障害として生きざるを得なくなっているのではないだろうか」と記しました。

かように、氏の臨床実践は、まさに時代に翻弄されていく人々が精神疾患化される現代へ、警鐘を鳴らし続けています。

われわれは、まさに今回のオープニングを飾るにふさわしい方をお呼びできたと思っています。多くの方のご参加を期待しております。

<メモ>

## B：シンポジウムⅠ テーマ：遊び心の謎に迫る

日時：11月3日（木）午前9時30分～午後12時

会場：人文・社会科学総合教育研究棟 W103

司会：川田学（北海道大学）

コメンテーター：穴澤義晴（札幌市青少年女性活動協会）

ファシリテーター：水野眞佐夫（北海道大学）・伊藤崇（北海道大学）

趣旨：遊びは人間らしさを構成する基盤的な活動であり、乳幼児期から生涯にわたって存在します。しかしながら、自然・社会環境の変容の中で、私たちは遊びの諸契機を失い、遊びは学びや労働と区別され、地位の低い活動であるとさえみなされる向きもあります。保育・教育の中では、遊びの重要性は依然として強調されているものの、「構成遊び」や「協同遊び」というように、内容や集団の形態論から語られることも多く、総じて、遊びという活動が内包する「遊び心」への視座が語られることは少ないと思われます。そこで、この企画では「遊び心」に定位し、遊び心が生まれる諸条件や発達におけるその意味について議論します。

発表者：加用文男（京都教育大学）

テーマ：子どもの遊び・大人のあそび心

要旨：「子ども達が遊べなくなった」「子どもの遊びがおかしい」と言われる時代になって、大人が子どもの遊びに指導的に関わる必要性が生まれたという人類史上の新課題に直面している。企業も子どもの遊びに営利参加してくる時代である。他方、ヒトは幼年時代だけでなく成体になっても遊ぶという特性を持っていて、結果的にこの問題が絡んでくる。すなわち、大人の遊び観がどこまで子どもの遊びに混入してよいか、という問題を考えに入れる必要性が生まれてきている。このことについて考えてみたい。

発表者：宮浦宜子（NPO 法人芸術家と子どもたち）

テーマ：子どもとアーティストが出会うときに起こる、いくつかのこと。

要旨：遊び心というものは、その自己目的性ゆえに、生きる喜びそのものに近いと考えられる。そういう意味では、アートと遊びは非常に近い関係にあるといえるだろう。アーティストが子どもたちとともにアート活動を行うとき、子どもたちの中に、遊び心が生まれているとしたら、アーティストのつくる遊び、そこでの、アーティストと子どものコミュニケーションは、遊び心が生まれる条件として想定することができるのではないか。具体的な事例やエピソードの検討を通して、いくつかのキーワードを提示したい。

## C：シンポジウムⅡ テーマ：学校の限界線上における学び

日時：11月3日（木）午後1時～午後3時30分

会場：人文・社会科学総合教育研究棟 W103

司会：横井敏郎（北海道大学）

趣旨：不登校・高校中退に代表される早期離学現象は、現在の学校（Formal Education）の限界がどこにあるのかを示しています。この局面に焦点を当てながら、1) なぜ子ども・若者が学校を去るのか、2) 学校以外の場での発達可能性をどのようにみればよいのか、3) 早期離学現象を視野に入れながら、どのような学びの場を学校内外に構築するべきなのかを考えます。

発表者：乾彰夫（首都大学東京）

テーマ：高校中退後の若者たちの生活・労働・学びと成長

— 内閣府高校中退者調査から —

要旨：高校中退はさまざまなリスクを負うといわれる。中退者のその後、どうなっているだろうか。内閣府が昨年実施した高校中退者調査をもとに、その状況と課題を探る。就労している者、高校に再入学している者、大学等に進学している者、家事・育児にたずさわる者など状況は多様だ。なかでも高卒資格のために高校再入学を試みる者は少なくない。しかし再入学後の高校は、中退経験者にとってどの程度、「居場所」となり得ているのだろうか。

発表者：加藤弘通（静岡大学）

テーマ：『高校に行かない』ことがもつ意味と中1にある〈希望〉

要旨：一般の中高生と非行少年を対象に行った全国調査をもとに、現代において高校に行かない人たちが、具体的に「何をもち」に社会に出て行くのかを明らかにし、学校教育からの早期離脱者の困難さを明らかにする。と同時に、学校からの早期離脱を防ぎうる発達のな変化が中学1年生の1学期にあるというある種の〈希望〉的見通しても同時に示したい。

発表者：吉田美穂（神奈川県立田奈高校）

テーマ：高校教育における「適格者主義」と「支援」を考える

— キャリア支援の取組を踏まえて —

要旨：高校は、若者支援政策において重要な役割を期待されている。しかし、試験を経て入学者が決まる高校の生徒指導の文化は、支援と容易に相容れない側面をもつ。高校における適格者主義と支援について考える。

**D：シンポジウムⅢ テーマ：労働の場での発達**

日時：11月3日（木）午後4時～午後6時30分

会場：人文・社会科学総合教育研究棟 W103

趣旨：学びの場で排除されてきた若者たちに、働く場は発達の可能性を与えるのでしょうか。働く場での排除と発達可能性、働く場で形成される身体や自我、そこで求められる学びとその支援について検討します。

司会：上原慎一（北海道大学）

発表者：石岡丈昇（北海道大学）

テーマ：現代マニラの都市底辺世界における仕事と時間

要旨：本報告は、現代マニラのスクオッター地区（不法占拠地区）を事例に、失業が住民の時間的予見を剥奪する点を論じるものである。「失業の何が問題か？」という問いかけに、既存の都市貧困研究はこう答えてきた。「失業は住民の経済生活を奪う。だから問題である」と。こうした経済生活剥奪論に対して、本報告は時間的律動の剥奪論とも呼べる観点より、失業を位置づけなおそうと思う。すなわち、「今後」を見えなくさせ、絶えざる「今」に当事者の思考を縛り付ける点に、失業と貧困の実存形態を見定めようと思う。マニラのフィールドワークをピエール・ブルデューの社会理論に接合して、上記の点に迫る。

発表者：大高研道（聖学院大学）

テーマ：社会的企業による若者自立支援と移行問題

— 労働者協同組合と若者自立塾 —

要旨：社会的企業が自立支援事業に取り組むことにどのような意味があるのか？本報告では、労協若者自立塾卒塾生を対象としたヒアリング調査から見えてきた移行の困難性および排除からの回復にむけた幾つかの重要な視点について正統的周辺参加論の文脈から明らかにする。その上で、あらためて働くことの意味と可能性を考えたい。

発表者：川村雅則（北海学園大学）

テーマ：労働の場での発達 それはいかなる条件のもとで可能か

要旨：労働の場は発達の可能性を与えるものであるが、わが国の現状を見れば、それを阻害する要因はあまりにも多いと言わざるを得ない。本発表では、福祉労働や建設労働の実態を踏まえつつ、労働の場における発達阻害要因を確認し、それを取り除くために必要な実践課題について提起する。

E：パネルディスカッション テーマ：人が育つシステムを再考する

日時：11月4日（金）午前9時30分～12時

会場：教育学研究院 会議室

発表者：向谷地生良（北海道医療大学）

日置真世（NPO 法人地域生活支援 ネットワークサロン）

司会：宮崎隆志（北海道大学）

趣旨：誰もがその発達可能性を抑圧されたり制限されることがない社会を「人が育つ社会」と呼ぶなら、そのような社会はどのようにしたら築けるのか。そのような社会の創造を見通した時に、現在の教育システムはどのように再編されるべきなのか。人が育つ福祉実践現場に凝集された問題と知恵を手掛かりに、今後の検討課題を探ります。

<メモ>

## 執筆者紹介 (掲載順)

青木省三 (川崎医科大学精神科学教室 主任教授)

加用文男 (京都教育大学・教授)

加藤弘通 (静岡大学・准教授)

乾 彰夫 (首都大学東京・教授)

吉田美穂 (神奈川県立田奈高等学校教諭・中央大学兼任講師)

川村雅則 (北海学園大学・准教授)

石岡丈昇 (北海道大学・助教)

大高研道 (聖学院大学・教授)

向谷地生良 (北海道医療大学・教授)

日置真世 (NPO 法人地域生活支援ネットワークサロン・北海道大学教育学研究院学外研究員)

《子ども発達臨床研究センター総合研究企画 (2011 サステナ企画)》

**遊ぶ・学ぶ・働く**—— 持続可能な発達の支援のために ——

### シンポジウム 報告書

2012年5月23日印刷

2012年5月25日発行

発行者 北海道大学大学院教育学研究院  
附属子ども発達臨床研究センター  
研究プラットフォーム委員会 (代表: 宮崎隆志)  
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目  
Tel/Fax 011-706-3495

印刷所 株式会社アイワード